Keio University

「安南国漂流物語」について

和田正彦

一　はじめに

わが国の漂流記に関する著書は、石井研堂編「校訂漂流奇談全集」（博文館発行、明治三十三年刊）以来数多く刊行されており、[1] 近年はこれに関して海事史・気象学・言語学・民俗学等の方面からの研究も盛んになり、[2] 文学の題材にもなって注目されている。しかし、江戸時代の中頃に安南即ちヴェトナムに日本人が漂着した記録は余り知られていないが、[3] これには次のように三例がある。

(1) 明和二（一七六五）年に漂流し、同四年に帰国した常陸国多賀郡磯原村の姫宮丸の沖船頭左平太以下六名（うち帰国者は四名）の記録である「安南国漂流物語」

(2) 第一例と同時期に漂流し、偶然にもその者たちと異国の地に邂逅した陸奥国磐前郡小名浜村の住吉丸の沖船頭善四郎以下六名（内帰国者は三名）の記録である「奥州小名浜之者安南漂流之次第」[4]

(3) 寛政六（一七九四）年に漂流し、翌年帰国した陸奥国名取郡閖上浜の大乗丸の沖船頭清蔵以下十六名（うち帰国者は九名）の記録である「南漂記」

このうち第三例については既に村松ガスパルドン女史によって[5] 詳細な研究がなされているので、ここでは、第一例の「安南国漂流物語」について、特に写本の収集と校訂・註釈による定本の作成、並びにヴェトナムの風俗・土産について記してある「安南国逗留中見聞仕候雑談」とヴェトナム語の常用単語を記した「安南語」の部分に重点を置いて研究してみることにする。

二　著者とテキスト

「安南国漂流物語」の著者は、帰国した漂流民を長崎まで引き取りに行った、江戸時代の代表的地理学者である水戸の長久保赤水[6]（一七一七―一八〇一）である。このことは、彼の当時の紀行日記である「長崎行役日記」に、明和四年十月廿六日から十一月四日（一七六七年十二月十六日から同廿四日）までの八日間の下関における風待ちを利用して、漂流者の談話を筆記したことが、このころ毎日東風打つづき、日数八日逗留す。是にて漂流人共にとふて安南記二巻并飄流海上図を作る。

と記されていることから明らかである。なお長久保赤水が何故、磯原村の庄屋に代わって長崎に行ったか、その著書「長崎行役日記」等についても興味深いものがあるが、この論文の目的には直接関係ないので省略する。

「安南国漂流物語」のテキストは現在のところ写本三十三種、刊本九種を数えるに至ったが、[7] 最良の写本と考えられる彰考館本

NII-Electronic Library Service

Keio University

を始めとして焼失したものもあり、実際に収集できた写本は二十[8]五種である。次に全テキストを列挙して解説を加えてみる。

(1) 漂流雑記本[9]（内閣文庫）半冊・全十七葉 23.7×17.0cm 安南国へ漂流の記（目次）常陸国多珂郡磯原村船頭友七以下安南へ漂流一件（表箋）

「漂流雑記」第五冊（寛政三年（一七九二）陬月　玄圃斎写）所収

(2) 昌平坂本[9]（内閣文庫）一冊・全二十葉 26.5×19.0cm 安南国漂流記（一頁）・常陸国多珂郡磯原村 船頭友七以下 安南へ漂流始末（表箋）

慶応乙丑（一八六五）に編修地志備用典籍となる。「昌平坂」の黒印あり。

(3) 海外異聞甲本[9]（内閣文庫）三半冊・全二十三葉 23.5×16.3cm 明和二年常州多珂郡之者安南国江漂流之事（巻之二目録）・安南国漂流之者共於長崎被相尋候申口（一頁）「海外異聞」巻之二（文政九（一八二六）秋八月　小柴研斎写）所収

(4) 海外異聞乙本[9]（内閣文庫）四半冊・全十八葉 23.5×16.3cm 水戸殿領地常陸国多賀郡磯原村之者外国漂流之事（巻之八目録）「海外異聞」巻之八（安永六年（一七七七）六月於大坂写之）所収。外国江漂流仕候奥州磐前郡小名浜村之者三人口書之写（全十四葉）も収む。

(5) 外国通覧本[9]（内閣文庫）四半冊・全十八葉 23.7×17.0cm 安南国江漂着之記（一頁）安南国江漂著之記（目録）「外国通覧」第二冊巻三所収

(6) 迷復記本[9]（内閣文庫）一冊・全二十八葉 23.3×16.5cm 明和二年十月　安南国漂流記（一頁）

「迷復記」[10]（菊荘翁纂緝・安永庚子（一七八〇）之秋　村山有成撰序）第十二冊所収

(7) 漂南聞略本[11]（国立国会図書館）三半冊・全十六葉 27.3×16.1cm 明和乙酉安南漂流記（一頁）、水戸磯原村弥八船姫宮丸安南漂流記（二頁）

「漂南聞略」（大槻玄沢写）巻上所収　読杜艸堂印（寺田盛業蔵書印）等あり。

(8) 漂流叢書本[11]（国立国会図書館）半冊・全十九葉 26.3×18.2cm 安南国漂流物語

「漂流叢書」（享和二（一八〇二）年　竹本光明編）第四冊第八巻所収 (42) 庶民史料集成本の底本

(9) 帝国図書館本[12]（国立国会図書館）半冊・全二十三葉 24.1×17.0cm 安南国漂流記　大寃国漂流（全九葉）を付す、

(10) 近藤文庫本[13]（都立日比谷図書館）一冊・全二十五葉 26.3×17.2cm 於長崎被相尋申内安南国逗留中ノ雑談（表題）・飄流之者於長崎被相尋候申内安南国逗留中見聞仕雑談（扉）文化二（一八〇五）写、近藤正斎蔵本、水府小林倍川所蔵之印あり。

(11) 史料編纂所本（東京大学史料編纂所）一冊全三十七葉 26.0×18.0cm 安南国飄流物語

NII-Electronic Library Service

Keio University

原本は故中山久四郎氏所蔵　架二〇四八―号一

(12) 海軍文庫本[14]（東京大学教養学部小佐田研究室）八半冊・全十三葉　22.4×15.6cm　明和年間常陸磯原村ノ左平太等安南国へ漂流ノ記・安南国へ漂流の記（目次）「漂流雑記」第五（岩田可忠・渡辺豊三郎同校）所収。(1)漂流雑記本の転写本。

(13) 久須美本（東京教育大学付属図書館）一冊全十九葉　23.6×16.9cm　明和二乙酉年安南国漂流記（表題）・明和二年十月安南国漂流記（一頁）久須美家蔵書印・東京師範学校図書印あり。久須美祐雋（蘭林）の蔵書か。ネ三九〇・一

(14) 佐久間本（国学院大学付属図書館）四半冊全十八葉　24.1×17.4cm　安南漂流記（表題）・安南国江流水戸廻船漂流の記（一頁）天明三（一七八三）年九月下春書。佐久間信恭が皇典講究所へ寄贈（大正三年十一月）。神昌丸漂民記・漂民上覧記・魯西亜渡来一件と合本。Ⅲ―五一三九

(15) 日本大学本（日本大学本部図書館）不詳　安南国漂流記　本図書館閉鎖中のため未見。

(16) 開拓使[15]本（北海道庁総務部行政資料室）三半冊・全十三葉　26.0×17.5cm　安南国漂流記　開拓使蔵書印あり。(17)函館図書館本の転写本。

(17) 函館[16]図書館本（市立函館図書館）三半冊・全十六葉　26.0×18.0cm　安南国漂流記　異国船漂着記・蝦夷騒動記と合本

(18) 彰考[17]館本（水戸彰考館）一冊　以下不詳　安南漂流記　長久保赤水の自筆本と考えられるが、昭和二十年の戦火で焼失す。

(19) 長久保[18]本（高萩市・長久保[19]源吾兵衛氏）一冊・全十六葉　26.2×18.3cm　安南国漂流物語（付飄流[20]安南海上図）

(18) 彰考館本の転写本で長久保赤水自身の控えといわれる。松月亭之印あり（松月亭は赤水の書屋名）。本論文の底本とする。

(20) 水戸[18]図書館本（水戸市立図書館）一冊・全十九葉　21.8×15.2cm　安南漂流記　天保三辰（一八三二）五月写

(21) 宝覚[21]山本（茨城県立図書館）二冊合本・全三十二葉　27.7×19.2cm　安南飄流物語上下宝覚山住人手写、杉田雨人蔵本・玉泉寺と加筆あり。

(22) 馬場[21]本（茨城県立図書館）一冊・全十五葉　26.5×17.8cm　安南漂流記　馬場氏印あり。漂民御覧記・魯西亜漂流記・魯西亜渡来記と合本。裏表紙の裏張に「御書院御番帳　四番　乙丑（文化二年・一八〇五）とあり。

(23) 瀬谷[18]本（水戸市・石原道博氏）半冊・全十六葉　24.7×16.5cm　安南国飄流物語　源氏繁栄記（四葉）と合本。「安南国逗留中見聞仕候雑談」と「安南語」を欠く。裏表紙に「小木津村浜　小野氏」・「成沢村黒沢氏」、表紙に「小野久米五郎」とある。日立市成沢の瀬谷義彦氏旧蔵。

NII-Electronic Library Service

Keio University

(24) 青木本[22]（那珂湊市　湯浅五郎氏）一冊・以下不詳　安南国漂流記
嘉永七年（一八五四）石神豊岡村　河野元介写之。那珂湊市の青木常之介氏旧蔵。

(25) 栗田文庫甲本（名古屋市・栗田文庫）不詳　安南国漂流記
（明和四）
戦災のため焼失

(26) 栗田文庫乙本（名古屋市・栗田文庫）不詳　安南国飄流人常州人弥八口上書（明和二）戦災のため焼失

(27) 藤氏本（京都大学付属図書館）二巻一冊・全二十一葉　23.5×17.2cm　安南国漂流記　藤蔵書印あり。上巻は「安南国逗留中見聞仕候雑談」（九葉）、下巻は「漂流之者共於長崎被相尋候申口」（十一葉）八八—ア—二

(28) 武道撫萃録本[23]（京都大学付属図書館）四半・冊全十四葉　23.8×16.7cm　明和二酉安南漂流記（表題）・安南漂流記（扉）
「武道撫萃録」（深沢陳清編）第三八三冊所収。越前船漂流記・阿州船漂流記・薩土漂流記・尾州桶狭間合戦記と合本。

(29) 九州大学本[24]（九州大学国史研究室）一冊・全二十葉　24.2×17.5cm・安南国漂流物語

(30) 九州文化甲本[25]（九州大学九州文化史研究所）不詳　常州多珂郡礒原村船頭左太夫安南漂流記
広東漂流記・無人島漂流記・撻担国漂着一件等と合一冊。

(31) 九州文化乙本[26]（九州大学九州文化史研究所）三半冊・以下不詳　安南国漂流記（明和六年）
昭和十三年謄写。異国船漂着記・蝦夷騒動記と合本。(17)函館図書館本[27]の転写本か。

(32) 奉天図書館本（不明）一冊・全十九葉・不詳　安南国漂流記・安南国飄流記

(33) 安南紀略藁本[28]（慶応義塾図書館）全五葉　26.3×18.6cm
「安南紀略藁」巻之一　国号及往来之事の中の「又（長崎志）云」以下の五葉。正斎蔵印・幸田成友印あり。二一五—一三三七—三

(34) 日本漂流譚本
石井民司（研堂）編述「日本漂流譚　第二編」（学齢館発兌・明治二十六年十一月刊）の「第六談　常人安南に漂流し同胞に邂逅して帰国す」（一—二〇頁）
これは自序に「予が此篇ヲ公ニシテ児童ノ読本ニ充ルモノ」とある如く、現代語訳のため史料価値は少ない。

(35) 奇談全集本
石井民司編校訂「校訂漂流奇談全集」（続帝国文庫第二二編）（博文館発行・明治三十三年七月初版刊）の「第十三編　安南国漂流物語」（二二七—二四四頁）
これは「享和元年（一八〇一）六月写」の写本を校訂したもので、(8)漂流叢書本の類本である。又同書には「第十四編　奥人安南国漂流記」（二四五—二四七）も収む。

(36) 近藤全集本

NII-Electronic Library Service

Keio University

書刊行会編輯「近藤正斎全集　第一」（同会発行・明治三十八年十一月刊）の「安南紀略藁　巻之一　国号及往来之事」の中の「又（長崎志）云」以下（九―一一頁）

これは(33)安南紀略藁本の類本の刊本である。(38)長崎志本を参照すること。

(37)　通航一覧本

国書刊行会編輯「通航一覧　第四」（同会発行・大正二年四月刊）の「巻之百七十七安南国部七　漂流」（五四四―五五四頁）

これは長崎志から引用した部分（五四四―五四七）と迷復記から引用した部分（五四七―五五四）とからなる。(6)迷復記本と(38)長崎志本を参照すること。

(38)　長崎志本

田辺八右衛門茂啓編輯・古賀十二郎校訂「長崎志正編（長崎実録大成）」（長崎文庫刊行会発行・昭和三年年一月刊）の「第十二巻日本ヨリ異国渡海之部　唐国ヨリ日本人送来之部　一、安南船ヨリ外国漂着之者七人送来事」（四五六―四六一頁）

(33)安南紀略藁本　(36)近藤全集本　(37)通航一覧本を参照すること。

(39)　古事類苑本

「古事類苑（神宮司庁蔵版）外交部二」（古事類苑刊行会発行・昭和九年一月刊）の「外交部十六　安南　漂流　（安南国漂流記）」（二二一―二二二頁）

これは安南国漂流物語の最初の一部分だけであるが、(2)昌平坂本の類本からとったものと考えられる。

(40)　南海漂流譚本

柴　秀夫編纂「南海潭流譚」（双林社発行・昭和十八年十一月刊）の「安南国潭流記」（一二五―一四三頁）

最初の部分が少し異なるが、他の部分は(8)漂流叢書本とほぼ同じ。

(41)　日本人漂流記本

川合彦充著「日本人漂流記（現代教養文庫五九八）」（社会思想社発行・昭和四十二年十二月刊）の「第一部　運命の漂流者たち安南（ベトナム）に漂着した二組の漂流者」（二一三―三八頁）

これも現代語訳で史料価値は少ないが、註に参考となる部分がある。

(42)　庶民史料集成本

池田　皓編集「日本庶民生活史料集成　第五　漂流」（三一書房発行・昭和四十三年九月刊）の「安南国漂流物語」（五八九―五九八頁）

これは(8)漂流叢書本を底本としている。なお解題・註記は参考になる。

なお「安南国漂流物語」をその構成形式・記述内容などの点から次の如く分類できる。即ち長崎奉行所による漂流者の調書の系統と考えられる[29]「口書系」、長久保赤水の著わした「安南国

NII-Electronic Library Service

Keio University

漂流物語」をほぼ正確に転写した「物語系」、そして「安南国漂流物語」を一部省略した「漂流記類」の三つがそれである。次に「安南国漂流物語」の系統表を付しておく。[30]

「安南国漂流物語」系統表

（Ⅰ）口書系
　海外異聞乙本
（Ⅱ）物語系
　(A)史料編纂所本・長久保本
　(A)′瀬谷本　(A)″宝覚山本
（Ⅲ）漂流記類
　(1)帝国図書館本系
　　(B)帝国図書館本・武道撫萃録本
　　(B)′藤氏本　(B)″外国通覧本
　(2)迷復記本系
　　迷復記本・久須美本
　(3)佐久間本系
　　(C)佐久間本　(C)′昌平坂本
　(4)水戸図書館本
　　(D)水戸図書館本・九州大学本
　　(D)′海外異聞甲本・馬場本
　(5)その他
　　漂流雑記本・海軍文庫本
　　漂南聞略本　漂流叢書本
　　近藤文庫本　安南紀略藁本
　　函館図書館本・開拓使本

三　内　容

「安南国漂流物語」の内容は、姫宮丸の水主らの銚子からマイニチハマまでの漂流中の模様とヴェトナム（マイニチハマ・会安）滞在中及び帰国までの行動を記した「安南国へ漂流の始末」、ヴェトナム滞在中に見聞した風俗習慣を記した「安南国逗留中見聞仕候雑談」、ヴェトナム語を記した「安南語」の三つの部分からなるが安南国へ漂流の始末の部分は研究の主要目的ではないので省略する。

「安南国逗留中見聞仕候雑談」は三十三の短文からなり、ヴェトナムの地理（漂着地マイニチハマ・逗留地会安）・行事（正月のさぎちゃう・端午節の競渡・盂蘭盆）・風俗（食事・人品・礼儀・きんま・葬礼・相撲・お産・育児）・産物（稲作・砂糖・竹・象・果然・蒙貴（共に尾長猿）・孔雀・鸚鵡等）・その他（衣類・暦・刀剣・蠟燭・剃刀・履・雪駄・金銀・銅銭・便所）について記されている。しかしこの三十三条のうちには、漂流者がほとんど無学に近いために、その見聞を聞き出して記述していく過程で既に誤謬があり、その上、筆写・転写していく時に、字句の入れ替えや欠落がおこり、現存の写本を読むと理解に苦しむものも少なくないが、その大半は当時の他の記録などと比較してみると、その記述内容の正確さがわかる。なおこの部分は三十三条すべて

NII-Electronic Library Service

Keio University

が全写本にある訳ではなく、写本によって多少の変化があるので、次に三十三条の[31]項目と各写本との関係を記し、解説を加えておく。

(1) マイニチハマ—全写[32]全写本にある。マイニチハマは漂着地の名称であるが、「安南国へ漂流の始末」に「先是（マイニチハマを指す）より十四五里南会安と云大湊ヱ行」とあるだけで、ヴェトナムの何処かは不明。なお函館図書館本にはマイニチ浜、漂流叢書本・馬場本には毎日浜と書かれている。

(2) 食事—全写本にある。朝夕の食事の時用いる丸膳—bàn bū'a（槃餡）—を卓子（物語系の写本）・シツホク（漂流記類の写本）と書いているが、シツホクは卓子の唐音であると「長崎行役日記」に記されている。又「貧者も皆米斗り用候、菜も魚類或ハ豕（ブタ）・鶏・家鴨（アヒル）等常に用候」とあり、日本との相違に驚いているようである。

(3) 衣類—全写本にある。但し昌平坂本は食事の条より船中の武具の条までを一文の如く続けて書いてある。衣類については「貧者も木綿、中以上の人ハ絹服、仕立縫様ハ唐人と同」と記し、khǎn（紬）についても「冠むり物も木綿或ハ縮緬にて頭を包む」とあり、女子の耳金にも言及している。

(4) 会安—全写本にある。漂流者の逗留地である会安については、[33]石原道博教授は、音が近いことと日本の朱印船の渡航がしばしばあった地方であるという二点から、これを乂安Nghệ-anに比定されているが、やはりこれは当時中国人貿易商人が活躍し、鎖国以前には日本人町もあった会安 Hôi An（フェフォ Faifoo）に比定[34]されるべきであると考える。何故ならば、会安は、柴市江の河口—大瞻海門又は大占汎口—より一里半程川上にあり、本文中の「会安ハ海より一里程川上の湊に御座候」と一致し、又「表向は皆瓦屋塗屏」についても、「大南一統志[35]巻五　広南省」の市舗に、「会安舗（中畧）南浜大江岸、両旁瓦屋蟬聯二里許」とあり、更に本文中に見える海国尊親（本尊ハ女の面躰）・配徳金山宮・関帝廟の三寺院も、同書の祠廟に記されている天妃祠・真武祠・関公祠に相当するものと考えられるし、会安の発音についても、海外異聞乙本に、「此ホイアンハ会安の唐音ニテ御座候」とあることから、ホイアンと発音していたことがわかるからである。

(5) 人品—全写本にある。ヴェトナム人は日本人と同様色白で「人品宜敷御座候」とあり、特に女子の美しさを述べ、官人らしき人は「衣類繻子・純子等を用イ」、lọng（蛩）という日傘を外出の時、用いること等を記してある。

(6) きんま—全写本にある。ヴェトナム人のベテル[36]を喰む風習について、「安南の人ハ貴賤共ニ惣して、ラホと申木実ホイと云白粉、ホイとは牡蠣の灰なり、是をカウと云木の葉ヱ包ミ、平生腰巾着ヱ入置、時々に食申候、或ハ刻ミ煙草ヱ交へて咀申候赤汁出て唇染り歯黒く成物なり、私共味イ見候処少々渋くて口中爽成る物ニ候、彼国にては客人の饗応にも不レ絶用申候」と詳しく記してあるが、漂流者らが安南のマイニチハマに漂着し

NII-Electronic Library Service

Keio University

た時に見たヴェトナム人が「皆総髪にて歯黒く何か赤き物を嚙で口の両傍赤汁に染み恐敷有様」であったと記している如く、この風習も日本人である漂流者らの目には奇異なものとして映ったのであろう。なお本文中のラホは tr'âu、ホイは hôi、カウは cau の訳音である。

(7) 正月―全写本にある。元旦節 Tê't（テト）に家の門に旗や鐘などを吊した青竹を立てるヴェトナムの風習、即ち cây nêu（核標）について「正月ハ門ヱ業竹ヲ壱本宛十五日迄立置」と記している。なおヴェトナムでは招魂儀(37)礼の時にも神幡などを吊すのに青竹を用いる。又日本における正月門に立てる松竹及び七夕に立てる笹竹、中国及び日本で祭場の周囲に立てる標竹、苗族が墓地に立てる青竹など儀式に竹を用いる例は多い。これは古代東洋人の霊魂思想の一面を暗示するものと思われる。次に、正月の子供の遊びとして棧(38)切丁（長久保本）という名で cai đu（核擲）というぶらんこにも言及している。なお本文の「男女の正月游ニ棧切丁ヲ作り、細竹弐本下ケ板の両方ヱ貫下より楔しめ、板ノ上に弐人宛乗りて突出して振り候、後ニハ乗人自ラ振り動して游び、上手振り申候ハ倒ニ成程ニ振リ申候」の文は、đánh đu（打擲）（ぶらんこ遊び）の内の đu đu'a（鄰迭）―頂を固定して斜めに立てた三本の竹を支柱にし、これを竹の横木でつなぎ、二人又は一人が乗り、自分の身体が地面と平行になるまで振った者を勝ちとするぶらんこ遊び―を指すものと考えられる。

(8) 端午節―全写本にある。ヴェトナム人が五月五日に bánh giun（餅蟲）を食べる習慣について、本文には「五月五日には生米を笹の葉ヱ包ミ入、煮て粽の様ニ相用候」と記している。又、ヴェトナムの競渡についても、「此日船游山あり、小船二十七八人宛乗り、舳ニ竜頭ヲ飾リ、艫ニ旗ヲ立、摺ヲ左右ニ拾八丁立てハイハイと囃して鉦・太鼓ヲ鼓し競ひ渡り候」と書いている。なお、ヴェトナムにおける競(40)渡は雨乞の祭礼として行なわれ、特に五月五日に行なわれるのは農耕に欠くべからざる水を確保するために雨乞いをする時期に相当するからである。

(9) 盂蘭盆―宝覚山本のみ欠く。ヴェトナムにおける年中行事のうち最も重要なものの一つに、旧暦七月十五日に行なわれる中(41)元節 Tê't Trung Nguyên があり、この行事は日本の盂蘭盆会と同じものである。ために本文の「七月の盆ハ不致候哉」は漂流者たちの見聞の誤りであろう。

(10) 象―漂流雑記本のみこれ以後の項目を欠く。漂流者らは「南京人ニ誘引セられ会安より三里程西ノ在郷象有所ヱ見物に」行き、象の食事や水飼を見物したことを記しているが、これらの象も「公儀にて買（飼）置物」で、軍用のために使役されたらしい。(42)

(11) 葬礼―漂流雑記本のみ欠く。漂流者らは会安滞在中に見物したヴェトナムの葬(43)礼についても詳しく記しているが、特に phương du（方帕又は方遊）について「女ハ一所に集り、廻りに長サ弐間横壱間斗りの幕ヲ引廻り行候間、装束之様子相国

NII-Electronic Library Service

Keio University

見申さず候」と書いてある。又「其所の風俗ヲ承るに貴人死して五月斗り不葬、家内に棺ヲ留置候、下輩の者ハ屍を当座ニ埋む、其時過て格式之葬礼ハ仕甲候」と興味深い事実を報告している。

(12) トンタイグンシ―漂流雑記本のみ欠く。「南京のトンタイグンシ」は南京人安南貿易商で、漂流者らを引き取り、ヴェトナム滞在中の世話及び帰国のための工作をしてくれた人物であるが詳細は不明である。又「安南国王の居所ホイホンコクとやら申処」は、会安をフェフォに比定すると、阮氏の拠所広南を指すものと考えられるが、何の音訳かは不明である。なお「結構成る乗物ニ乗リ上下拾四五人にて往来致候」の内の結構成る乗物とは、ハンモック式の駕籠、即ち kiệu[44]（轎）を指すものと考えられる。

(13) 焚火―漂流雑記本のみ欠く。「安南国ハ火を焚時に硫黄附木不レ用」ので、漂流者たちが「着岸の始、舟道具ヲ割リ焼候節、附木無く火附兼至極に困リ申候」と記しているが、ヴェトナムで付木を用いない理由を「畢竟暖国故、薪柴火移リ能キと相見候」と推測している。

(14) 稲作―漂流雑記本のみ欠く。本文に「安南国の稲作ハ年ニ弐度宛刈納申候」・「一作ハ霜月植ヱ三月刈、一作は五月植テ九月刈」とあるは、ヴェトナムの代表的な二種類の米、即ち占城米[45] luá chiêm と糯米 gạo nếp を指しているものと考えられる。次いで稲作の様子や農作物について記し、「米直段日本升壱升程、安南銭拾弐文、酒ハ廿四五文位」と米や酒の値段にも触れ、最後にヴェトナムと日本の尺の違いについて、「安南の壱尺ハ日本の壱尺五寸ニ候」と記している。

(15) 金銀銭―漂流雑記本のみ欠く。安南銭は「金生宜しからず」、「南京銭も多く入雑通用致」し、「惣而銭通用にて」「金銀は平生通用無之」と記しており、「銭ハ六拾文ヲ百文と定メ候間、安南国の壱貫文は日本の長銭六百文也」と、漂流者ら自身の会安における見聞を記してある。

(16) 産物―漂流雑記本のみ欠く。漂流者たちが帰国のために乗った南京亥四番船に積んだヴェトナムの産物として、「砂糖・胡椒・牛皮・牛角・象牙・科藤・奇南・柄鮫・薬種の類」及び孔雀・鸚鵡・「烏の様成鳥」即ち山呼・「猫之様ニテ尾長キ獣」即ち蒙貴・象牙をあげている。

(17) 砂糖―漂流雑記本のみ欠く。ヴェトナムにとって砂糖は、「私共乗船ヱも二千俵積候、其外ニ拾七八艘の南京船ハ何れも買積候、安南国の砂粋第一大分ニ相見候」と漂流者らが述べているように主要生産物であり、かつ又主要輸出品でもあった。このことは「和漢三才図会　巻九十蔬果類」[46]の氷饐・饐霜・石密に、「自ニ異国ニ所レ来大概記ニ于左ニ、白沙糖者凡二百五十万斤（中略）凡太冤為ニ極上ニ、交趾次レ之…、黒沙糖凡七八十万斤、交趾為レ上…、」と記されているように、日本でもヴェトナムの砂糖の良質であることを高く評価していたことと、「バタビヤ城日記」の寛文三年（一六六三）に、支那戎克船の輸入せる砂

NII-Electronic Library Service

Keio University

糖類として、「交趾四隻　白糖三〇二六〇斤、黒糖一二二〇〇〇斤」とあり、白糖は合計の五分強、黒糖は四割五分強に達することからも判る。

(18) 暦―漂流雑記本のみ欠く。漂流者たちが、貰った「安南去年の暦」を見て、「国号年号共に大清トハ違ひ」、大越・景興と記されていることと、「当亥（一七六七）の閏月」が「安南ハ日本ト同じ九月」であって、大清国の閏七月とは違っていることから、ヴェトナム（安南）が「大清トハ別国別王」の独立国であると判断していることは興味ある記述である。[47]

(19) 礼儀―漂流雑記本・函館図書館本はこの条を欠く。ヴェトナム人は中国人と同じく、「人ニ対し礼致し候時ハ、必ず立て、両手の指ヲ組合せ、首を少し屈メ、頭を下ケ礼致し候」と記してある。

(20) 猿―漂流雑記本・漂流叢書本・佐久間本・函館図書館本・九州大学本・奇談全集本・南海漂流譚本はこの条を欠く。本文に「尾長く猫の如くに候、臀赤からず、手飼ニ致候時ハ、尾を切り申候」とある「安南の猿」とは、果然（即ち尾長猿）を指すものと考えられる。

(21) 刀剣―漂流雑記本のみ欠く。「安南の太刀ハ、日本の刀」と同じ作りで、「柄・糸縁・目貫・鍔・鞘等造り様も日本の三度拵と同じ」であるが、刀の下げ方が「柄と鞘トと糸の両端にて縛り、左りの肩に掛ケ、右ノ脇ヱぶら下ケ、上衣ニ帯無」く、日本とは異なる。又「劔ハ一切見当リ不申候」と記している。

(22) 船中の武具―漂流雑記本のみ欠く。この条には、「南京人、船中にて刀剣の類、武具の類所持不仕候」と記してある。

(23) 蠟燭―漂流雑記本・昌平坂本・佐久間本はこの条を欠く。この条には、「安南にて、蠟燭を甕中ヱ塩漬ニ仕貯候、卵も同様に候」と記してあるが、当時ヴェトナムでは、蠟燭や卵をこのような方法で貯蔵しておいたようである。

(24) 剃刀―漂流雑記本のみ欠く。昌平坂本はこの条より便所の条までを一文の如く続けて書いてある。「小包丁の如く、刃先角にて柄を附引廻して、刃ヱかぶせ置候、」と記されている「安南の剃刀」とは、摺刀―即ちヴェトナム語では dao xếp（交笈）という―を指すものと考えられる。

(25) 履・木履―漂流雑記本のみ欠く。本文に「底は革にて、甲は羅紗・繻子抔のきれを用候」とある「安南の履」は、皮履―即ち giầy da（鞋胯又は鞜胯）―を指し、「鼻緒有之、日本の如くにはき申候」とある「木履」は guốc（跼又は梮）を指す。

(26) 雪踏・草鞋・竹―(25)履・木履と一文の如く続けて書いてある写本もある。漂流雑記本のみ欠く。雪踏も草鞋も「日本の如く、造り様も同様」であるが、草鞋は「からむし（苧）ニテ造り候、稲の藁をば不用」、又、「惣じてわら細工ハ無」く、縄綱なども科藤・櫟皮・棕櫚・竹などで作られていると記している。文末には、「川辺の小屋ハ皆竹の柱にて作リ申候」とある。これらはヴェトナムにおける竹 tre（椥）の利用度の高さを示

NII-Electronic Library Service

Keio University

すものであろう。

(27) 籾の字―漂流雑記本・迷復記本・佐久間本はこの条を欠く。本文には「安南にては、籾ノ字粟と書き申候」とあるが、籾は国字であるのでヴェトナムで用いられていなかったのは当然である。又籾の代わりに粟を用いていたとあるが、漢字の母国である中国でも同様に粟[48]を用いている。

(28) 会安の湊―漂流雑記本は全文を欠く。馬場本は田畑肥て以下を欠く。迷復記本・久須美本は田畑肥て以下を(14)稲作の文末に付けてある。会安ノ湊の様相について「正月ヨリ、南京船十七八艘或ハ弐拾艘、其外諸国の船、七月末迄逗留仕、商物仕入候、南京人斗りも千弐三百人居候間、上半年ハ至極賑々して、市ノ如く押合通り候」と記しているが、会会における南京人、即ち清人については、「大南一統志　巻之五　広南省」の市舗に、「会安舗（中略）清人居住、有二広東・福建・潮州・海南・嘉応五幇一、販二売北貨一、中有二市亭会館一、商旅湊集、其南茶饒潭為二南北船艘停泊之所一、亦一大都会也」とあるので、会安の繁栄の様子とともに、本文の正確さがわかる。次に「圊も小便所もなく、貴賤男女大小便猥り平地ニ下し候間、路辺悪臭甚敷候」と記されているが、ヴェトナムにも圊、即ち厠も小便所もあるので、漂流者らの見聞に誤りがあるものと考えられる。

(29) 髪結ひ等―史料編纂所本と長久保本にある。漂流者たちは「初の程ハ、唐人同様ニ髪髭も刺り不申居候処、」ヴェトナム人にも「段々近付も出来申候間、髪・月額仕候へば、俄ニ綺麗ニ相成申候間、里人共六七人、天窓を撫廻し、髪油を嗅見申候、余リ綺麗と存候哉、子供壱人連レ参りて、顔ヲ刺リ呉ヨト御座候間、眉毛・顔の内を刺リ申候」と自分たちの体験を記してある。

(30) 力立・相撲―漂南聞略本（安南国追加の部分にある）、漂流叢書本・函館図書館本・奇談全本・南海漂流譚本にある。漂流者たちは、会安において、夏の昼下り、ヴェトナムの若者たちと腕押や相撲をしたが、圧倒的に漂流者たちの方が強いため、ヴェトナムの若者たちは「其後ちから立をこのみ申さす候」と体験談を記している。なおヴェトナムの相撲[49]は đánh vật（打勿又は打物）といい、祭礼に村毎に組を作って行なう。その方法は、日本と同様に裸体に褌を締めた力士―ヴェトナム語では đô vật（都勿）・chụi vật（𧾷勿）・đô lực sĩ（都力士）などと呼ぶ―が先ず村の守護神を祀ってある đình（亭）に勝利を祈願してから、太鼓を合図に行なわれる。

(31) 俗論語―迷復記本と久須美本にある。本文に「安南国にて、子供・娘に俗論語と申本をあてかい、読習わせ申候」とある俗論語とは何を指しているか詳らかではない。又、「私共逗留の中、かり請写し取持参致し申候」とあるが、漂流者らがヴェトナムから持ち帰った品物の一覧表である「会安より貰し品々」には見当らない。

(23) 産と育児―昌平坂本（(24)剃刀以下の諸条と一文の如く続けて書いてある）・佐久間本にある。当時ヴェトナムでは、「産を致

NII-Electronic Library Service

Keio University

候に」、産婆も呼ばず、産婦が「壱人にて始末致」し、七夜も過ぎないのに、「乳呑子に飯を食させ」、産婦自身も「乳呑子を抱て」「雨天の時分も仕事」をすると、漂流者らは驚きをもって記しているようである。

(33) 帰国―漂流雑記本・迷復記本・帝国図書館本・近藤文庫本・久須美本・武道撫萃本は欠く。昌平坂本・海外異聞甲本・外国通覧本・漂南聞略本・函館図書館本・水戸図書館本・馬場本・藤氏本・九州大学本はこの条を「安南語」の後に記してある。この条は他の条と異なり、漂流者たちが長崎に帰国した時の様子を記したものであるが、長久保本に従ってここに入れておく。本文には、「南京人の船、長崎ヱ着候時ハ、海口に暫く碇を脱し止り候、番所より物見船壱艘出し、続て引船弐拾弐艘迎に出て湊ヱ引入申候」とあるが、漂流者たちは、南京亥四番船に乗って明和四年七月十六日に長崎に帰国すると、長崎奉行新見加賀守正栄によって立山御屋敷にて、「宗門御糺し、踏絵被仰付、漂流の次第一通り御穿鑿」され、後揚り屋に入れられ、十月十三日に長久保赤水らに引き渡され、十二月十六日に、二年二ケ月ぶりで故郷の水戸に着いたのである。

「安南語」は百六十九語のヴェトナム語の常用単語を、意味を示す漢字・片仮名（小字）とヴェトナム音を示す片仮名で記した部分である。しかし、従来はこの部分についての研究がほとんどなされていなかったので、ここでは、百六十九語全部について各々の原語クォック・グウ Quốc ngữ との比定を試みた。しかし、他の部分と同様に、漂流者たちの記憶違いや筆写の際の書き誤りなどもあるようで、百六十九語すべてに相当する原語を見い出すことはできなかったが、次にその実例を示す。なお全テキストのうちで、「安南語」の部分があるものは十七種であり、各テキストによって多少の相違があるが、繁雑になるのでここでは省略する。

一イチ	モツ một	二ニイ	ハイ hai
三サン	バア ba	十ヂウ	モイ mười
日ジツ	ライ ngày(?)	月ゲツ	タン tháng
星セイ	タ ?	雲ウン	マイ mây
雨降アメフリ	モハ mưa	水ミヅ	ヌツク nước
父フ	チャア cha	母ボ	マア mẹ(?)
妻サイ	バア bà	子シ	コン con
酒サケ	レウ rượu	飲ノム	ヲム uống
米コメ	カウ gạo(?)	粟アハ	ロウフ lúa
雞ニハトリ	ガア gà	魚ウヲ	カア cá
手巾テキン	カン khăn	綿ワタ	ボン bông
笠カサ	ノン nón	碗ワン	バツ bát
在アル	コウ có	無ナキ	コン không

以上「安南国漂流物語」について、テキストの紹介とヴェトナムの民俗（「安南国逗留中見聞仕候雑談」）・言語（「安南語」）を

NII-Electronic Library Service

Keio University

中心に略述してみたが、未だ研究の十分でない部分も多く、例えば、江戸時代の日本に伝えられた他のヴェトナム語―「南漂記」の「解詞」、「安南紀略藁」巻之一「甲寅漂民始末」の「風土記」の「方言之事」と「天明七年紅毛船所載来ノ安南人四人ノ語」―との比較研究なども今後に残された課題である。

註

(1) 漂流記に関する文献目録としては、「日本庶民生活史料集成 第五巻 漂流」(三一書房発行・昭和四十三年九月刊)及び、川合彦充著「日本人漂流記」(現代教養文庫五九八)(社会思想社発行・昭和四十二年十二月刊)の「参考文献」が良い。しかし単行本のみで、研究論文を欠く。

(2) 例えば、古くは野上弥生子著「海神丸」(改造社発行・大正十三年刊)、近くは井上靖著「おろしや国酔夢譚」(文芸春秋社発行・昭和四十三年刊)等があげられよう。

(3) 安南漂流記三種に関する研究には、沢井常四郎編「仏領印度支那 全 一名仏囲日南の新領土」(文明堂発行・明治三十六年 月刊)の内の高楠順次郎博士の研究―「八、安南漂流海路略説」及び「九、安南の数詞、人代名詞、及びその文字」―と、石原道博「安南漂流記の研究」(茨城大学文理学部紀要(人文科学)第九号 二十三―三十六頁 昭和三十四年二月刊)がある。

「安南国漂流物語」に関する研究には、他に左記の三論文がある。

大内直之「奉図所蔵写本 安南国漂流記に就て(一)、(二)(未完)」(収書月報二十七 十三―十五頁、同二十九 十四―十七頁、満洲鉄道㈱ 奉天図書館発行・昭和十三年刊)

湯浅五郎「水戸領磯原村弥八持船 姫宮丸漂流物語」(週刊てんおん五七七 八―十一頁、同五七八 十四―十六頁、同五七九 十六―十七頁、天恩商事発行 昭和四十一年刊)

石原道博「いわゆる漂流物語について」(週刊てんおん五九三八―九頁、天恩商事発行・昭和四十一年刊)

(4) 「奥州小名浜之者安南漂流之次第」の写本は、海外異聞乙本・函館図書館本・開拓使本・安南紀略藁本・九州文化乙本に収められている。又刊本には、長崎志本・通航一覧本・近藤全集本・奇談全集本がある。

(5) Mme Muramatsu-Gaspardone; NAMPYŌKI 南漂記 [Naufrage dans le Sud] traduit, avec une introduction et des notes, B.E.F.E.O. Tome XXXIII, 1933, 35-120p.

(6) 長久保赤水に関する主要な著作には、
杉田雨人著「長久保赤水」(杉田恭助発行・昭和九年四月刊)
住井すゑ著「日本地理学の先駆 長久保赤水」(精華房発行・昭和十八年刊)
茨城県郷土文化研究会編「長久保赤水」(同会発行・昭和四十五年三月刊)
がある。

(7) テキストの収集に際しては、「国書総目録 第一巻」(岩波

NII-Electronic Library Service

Keio University

書店発行・昭和三十八年十一月刊）の安南国漂流記の項、同書の第六巻（昭和四十四年四月刊）の漂流記の項などに負うところが大である。

(8) 未収集写本は次の八種である。焼失によるもの三種（彰考館本・栗田文庫甲本・同乙本）・外国にあるもの一種（奉天図書館本）・その他四種（日本大学本・青木本・九州文化甲本・同乙本）

(9) 「内閣文庫国書分類目録　下」（昭和三十六年刊）地理四、外国地誌（五）漂流記　(1)編六―一八五―一三四　(2)編一―一八五―一六八　(3)(4)教三三―一八五―一三三　(5)編三―一八四―二五四　(6)編一二―一八五―一四六

(10) 外に宮内庁書陵部（片玉集後集巻十七―十九）・東北大学図書館狩野文庫（七巻七冊）にも所蔵されている。

(11) 「帝国図書館和漢図書書名目録　第一編（明治二十六年末現在）」（明治三十二年刊）八〇五頁下　(7)三―一三一―二三　(8)一三―一五五―六四

(12) 「帝国図書館和漢図書書名目録　第二編（明治二十七―三十二年）」（明治三十六年刊）一四頁上　一―一九一―三五四

(13) 「東京都立日比谷図書館蔵近藤記念海事財団文庫目録」（昭和四十一年刊）漂流記（航海記）　四〇頁　八三八

(14) 「日本海事史料目録　第一集」（日本海事史学会編・昭和四十二年刊）　海軍文庫旧蔵大日本海志編纂資料　第四部門外交海防　丙、漂流　一三頁

(15) 「北海道所蔵史料目録　第五集（旧記の部）」（北海道総務部文書課編・昭和三十八年刊）　三頁　一四一一（三七三―一九―旧記―一）

(16) 「郷土資料目録　第一集　異国船渡来並関係資料展覧会出陳目録」（函館図書館編・昭和二十三年刊）　四六頁　〇〇二三〇―〇〇〇七―六〇〇一

(17) 「彰考館図書目録」（彰考館文庫編・大正七年刊）巻之廿二　申部　雑書　外交類　八二八頁　一―四三―写

(18) 石原道博「安南漂流記の研究」

(19) 長久保源吾兵衛氏は長久保赤水の六代目の孫にあたり、赤水の書屋松月亭の故地（茨城県高茨市赤浜三番地）に住まわれている。

(20) 「飄流安南海上図」は、「長崎行役日記」の下関の記事から、長久保赤水が作図したものであることは分かるが、長久保本を除いては何れのテキストにも無い。なお本図は当時の東南アジアの地理に関する知識を知る上で興味深いものである。

(21) 「（茨城県立図書館）蔵書目録　郷土資料篇」（同館編・昭和四十四年刊）〇九六　歴史

(21) 一二頁　二一八　〇九二―四五三

(22) 三二頁　六二二　〇九二―二〇八

(22) 湯浅五郎「姫宮丸漂流物語」

(23) 「京都帝国大学付属図書館和漢図書分類目録　第一冊」（昭和」（十三年刊）　二二八頁下　一〇―〇一・フ・三

NII-Electronic Library Service

Keio University

(24) 「九州帝国大学付属図書館図書目録　和漢図書増加篇　第三（昭和十一年一月―同十三年十二月）」（昭和十六年刊）　一一頁右　国史―二C二六二

(25) 「九州文化史研究所所蔵古文書目録　第一分冊」（昭和三十一年刊）　一六頁　長沼文庫　B、海事関係　五三

(26) 「九州文化史研究所所蔵古文書目録　第三分冊」（昭和三十三年刊）　一三二頁　写本類目録　E、雑　二三

(27) 大内直之「奉図所蔵写本　安南国漂流記に就て」

(28) 他に慶応義塾図書館（二一五―一三三八―三・古川氏蔵書）・国立国会図書館（三―一二九―五）・内閣文庫（数三―一八四―二四九　編三〇―一八四―二六七）等にも所蔵されている。

(29) 長久保赤水も「安南国漂流物語」を著わすに際して参照したものと考えられる。

(30) 収集できた写本のみの系統を示す。

(31) 三十三条の項目名は著者が便宜上付けたものである。なお一文を二文の如く書いたり、二文を一文の如く書いたりする等の相違や字句の違いなどは繁雑になるので省略する。

(32) ここでいう全写本とは、左記の「安南国逗留中見聞仕候雑談」を有している写本二十種と刊本二種をさす。
漂流雑記本・昌平坂本・海外異聞甲本・外国通覧本・迷復記本・漂南聞略本・漂流叢書本・帝国図書館本・近藤文庫本・久須美本・佐久間本・函館図書館本・長久保本・水戸図書館本・宝覚山本・馬場本・藤氏本・武道撫萃録本・九州大学本（以上写本）奇談全集本・南海漂流譚本（以上刊本）

(33) 石原道博「安南漂流記の研究」

(34) なお川合彦充氏は会安＝フェフォ説をとっている。（「日本人漂流記」二九頁）

(35) 「大南一統志　第一輯」（印度支那研究会発行・昭和十六年三月刊）

(36) きんまに関する研究には、古賀十二郎「キンマ雑考」（「日葡交通」第二輯（日葡協会編纂・東洋堂発行・昭和十八年三月刊）一―三五頁）があるが、ヴェトナムに限ると、松本信広「安南人のおはぐろ」（「史学」第十二巻第四号（三田史学会発行・昭和八年十二月刊）九六頁）・同「印度支那の民族　一、安南人」（「印度支那の民族と文化」（岩波書店発行・昭和十七年十一月刊）四―五頁）などがある。

(37) ヴェトナムにおける招魂儀礼に関する論文としては、Nguyễn-Văn-khoan; Le Repêchage de l'Âme avec une note sur les hồn et les phách d'après les croyances Tonkinoises actuelles, B.E.F.E.O. Tome XXIII-Fasc 1, 1933, Hanoi, 1934 11-34p. がある。

(38) 他の写本では、さきちゃう（昌平坂本・海外異聞甲本・史料編纂所本・佐久間本・宝覚山本・藤氏本）・さきてふ（漂南聞略本・帝国図書館本・水戸図書館本・武道撫萃録本）・さきてう（漂流叢書本・函館図書館本・馬場本・九州大学本）・左

NII-Electronic Library Service

Keio University

義長（迷復記本・久須美本）・サハチャウ（漂流雑記本）・サギチャウ（外国通覧本）・さきちう（近藤文庫本）等と書いてゐる。

(39) cái đu については、Pierre Huard et Maurice Durand; Connaissance du Việt-Nam, Hanoi, 1954 chap., XIX Plaisirs et distractions(sauf la musique) l.—Distractions et jeux d'enfants A. Balançoire 1° Đu đu'a 237-238p. に詳しく書かれている。

(40) 山本達郎教授は中国・ヴェトナム・日本等について競渡の行事の分布を調べ、「競渡は本来は祭礼として雨乞の色彩が甚だ強く、又農耕的な豊饒を祈る意味をも持ってゐる様である。安南に於ては最も明確に雨乞の行事として現われてゐる。」と記されている（「競渡考」（「東洋史研究」第八巻第一号（昭和十八年三月刊）三一—三二頁）が、このことは、広治省の烏烏渓・広平省の日麗陂・安生渕などで、禱雨のために競渡が行なわれていた（「大南一統志　第一輯・第二輯」（印度支那研究会発行・昭和十六年刊）巻七　広治省・巻八　広平省　渓潭）ことからもわかる。

(41) 中元節については、P. Huard et M. Durand; Connaissance du Việt-Nam' chap., VII Calendrier et Fêtes II.—Fêtes p. 78 に見える。

(42) 軍象については、「歴朝憲章類誌」巻之三十九　兵制誌　設置之額、及び同書巻四十　兵制誌　調集之具　象馬に見える。

(43) 葬礼については、P. Huard et M. Durand; connaissance du Việt-Nam, chap., IX La Vie Sociale l.—La famille E. L'enterrement 96-98p. に詳しく書かれている。

(44) kiệu については、周去非撰「嶺外代答」巻六 器用門の抵鵲や蔡廷蘭撰「越南紀略」の輞子に詳しい。

(45) 吉田東伍著「大日本地名辞典　下巻」（冨山房発行・明治四十年十月二版刊）の「阪東　常陸国　多賀郡　磯原」（三七四五頁）に「稲の一種に、安南穀あり、天明・安永中、多珂・久慈、処々之を種う。明和中、多珂郡磯原村の舟人、安南に漂流して、之を伝ふる所とぞ。」とあるが、安南穀が占城米であるか否かは不明である。なお漂流者の「会安より貰し品々」には見当らない。

(46) 寺島良安編「和漢三才図会」（同書刊行委員会編集・東京美術発行・昭和四十五年三月刊）

(47) この暦については「会安より貰し品々」にも、「暦（大清壱ツ　安南壱ツ）と見えるが、「長崎行役日記」によると、江戸小石川の水戸藩邸にて、漂流者たちが献上したとある。

(48) 粟については、日野開三郎「唐宋時代に於ける粟の語義・用法」（「東洋学報」第三十六巻第二号（東洋学術協会発行・昭和二十八年十二月刊）三三—六四頁）・同「米」（「西日本史学」第九号（同会発行・昭和二十七年一月刊）九—三一頁）が詳しい。

(49) 相撲については、P. Huard et M. Durand; Connais-

NII-Electronic Library Service

Keio University

sance du Việt-Nam, chap., XIX Plaisirs et Distractions (sauf la musiaue) 1.—Distractions et jeux d'enfants C. La lutte (đánh vật) 239-240p. に見える。

(50) 「安南語」についての研究には次の二論考がある。
高楠順次郎「九、安南の数詞・人代名詞、及びその文字」（沢井常四郎編「仏領印度支那　全一名仏圏日南の新領土」所収）
三根谷徹著「越南漢字音の研究（東洋文庫論叢第五十三）」（東洋文庫発行・昭和四十七年三月刊）の「I　序説　3　越語史研究資料　6　漂民の記録」（一六—一八頁）

(51) 「安南語」の部分があるテキストは、昌平坂本（漢字のみ）・海外異聞甲本・外国通覧本・漂南聞略本・漂流叢書本・佐久間本・函館図書館本・水戸図書館本・宝覚山本・馬場本・藤氏本・九州大学本・日本漂流譚本・奇談全集本・南海潭流譚本（以上十四種は意味を示す片仮名を欠く）・長久保本・史料編纂所本の十七種である。

〈付記〉本稿は、昭和四十六年一月に提出した学部卒業論文の主要な部分を書き改めたものである。論文の指導を頂いた竹田竜児先生、史料の提供と貴重な助言を頂いた石原道博先生・長久保源吾兵衛氏並びにテキストの閲覧に便宜をはかって下された研究所・図書館に厚く御礼申し上げます。

NII-Electronic Library Service